



## 小学校社会科教科書における語彙の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 三上, 勝夫, 矢部, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00003912">https://doi.org/10.32150/00003912</a>

## 小学校社会科教科書における語彙の分析

三上勝夫・矢部玲子

### はじめに

教科書は、主として言語によって児童生徒に教科内容を伝達し、指導するうえでの基本的な教材である。

これは、異論を唱えるまでもないことであるが、この「言語による」教材ということが意外に大切にされていないと思われる。ここでは、主として小学校社会科の教科書で用いられている語を、国語教科書中の語および『教育基本語彙』(坂本一郎)と対照し、記述の難易を語彙論的に検討してみる。あわせて、今後の教科書の記述の方向を展望してみようと思う。

#### 一 「語彙の基準」の出現

教育現場では、様々な実践や指導法の取り組みがなされている。しかし、大部分の教室では、検定教科書に沿った指導が行われている。この教科書中の文章が、どのような基準によって作成されているのか、されるべきであるのか、近年、この方面への関心が、国語の教科書において高まって来ている。それを示すものとして、昭和61(1986)年度改訂の小学校国語教科書は、全6社中2社が、教師用指導書中に、教科書で指導する単語の「語彙表」を、「新教育基本語彙(阪本一郎 昭和58(1983)年 学芸図書)」等による難度別に分類して掲出し、うち1社は、それとは別に「語彙指導」「言語指導」の方法例集2冊を、指導書として出版している<sup>(1)</sup>。このような状況は、初めてのことである。

目下のところ、これらの「教科書の語彙」を見直し、その基準を作ることで、教科書自体を「語彙教育の基準」として位置づけていこうとする動きは、始まったばかりである<sup>(2)</sup>。それゆえ、教科書会社毎の扱いも、現行(平成元(1989)年)では、各社あまりにも差がありすぎる。しかも、これが現場の実践にどう結びつき、効果を上げられるかは、まだまだ未知数のところが多い。何よりも、このように出版された資料を、現場の教師一人一人が、日常の実践に使いこなすべく、関心を持って理解し努力することが、今後の急務であろう。また、このような、教科書中の言葉の分類がくり返し行われていけば、「小学校において習得すべき語彙」が、教育漢字のように設定できる可能性も出て来る。

いずれにせよ、「語彙表」作成のような動きは、学校教育の現場に「語彙教育」を定着させる、重要な第一歩となるであろう事は、間違いない。

### 注

(1) 平成元(1989)年改訂・小学校国語教科書各社指導書中の語彙表の取扱い

(東書)

昭和61(1986)年度より「学習基本語彙表・分類語彙表」記載(153頁)。

平成元(1989)年度より「漢字語句指導資料」削除。単語に関しては、漢字の制約のない状態での把握が可能になった。

(教出)

「漢字使用度数」の形で記載(44頁)。従って「教育漢字」を含む語彙のみ把握可能。

(学図)

「学習語彙一覧表」(16頁)。3～6年の脚注欄から自主選定(教科書会社内部で設けた選定基準)された。

難語句一覧表。

(日書)

「小学校学習漢字表(附音訓)」のみ。

(大書)

該当資料なし。

(光村)

「学習指導書・指導資料編」中に、「常用漢字表、熟字訓、漢字語句指導資料(新出、読みかえ、提出頻度数)」(106頁)。語彙事項の指導資料としては別に次の3冊がある。

「語彙指導の方法—語彙表編」「同一指導事例編」「言語指導の方法—言語教材の生かし方」。

なお、教科書本文中に「教科に関係のある言葉(2頁)」として、他教科の教科書に出てくる、スポーツ、法律、科学等の用語を掲出し、理解を働きかけている。

解説等はないが、6社中では唯一の取り組み。

(2)「言語事項とりたて指導入門講座(林進治 昭和45(1970)年 明治図書)」等のように、教科書を離れた形で語彙指導を行う試みは、以前にもあった。教科書中の語のみでは偏りが生じ、適切な指導を行えない。指導すべき語は、言語環境中のすべての語彙を検討の上、決定すべきである。というのが実践の理由であったが、これらの指導法は、現場の支持を得るには至らなかった。教科書指導に加えての負担、漢字の基準に頼ってれば、語彙の基準は必要ないという従来の状況や意識が、その原因である。今回のように、教科書の言葉そのものを語彙教育の中に取り込もうとする試みは、全く新しいものである。

## 二 国語科以外の教科書の「語彙」の現状

翻って、他教科の教科書における語彙の扱いは、どのようになっているのであろうか。これらの中には、国語科とは違う、いわゆる「専門用語・事項」がたくさん含まれている。このような語彙は、指導の上で

a. 意味の上で、国語科で教えられる(日常生活で皆が共有できる)ような言葉とは、ズレが生じている。

b. 児童生徒の理解語彙以上の言葉が、わかりやすく言い替えられることなく、そのまま押しつけられている。

等の問題を含んでいる。これらの問題に関しては、国語科以上に関心が払われなければならない。しかし現状はどうであろうか。

このことを検証するため、小論では、東京書籍の小学校社会科教科書を取り上げ、同社国語科教科書との語彙の比較を行った<sup>(1)</sup>。

調査の開始に当たり、教科書作成者側から取材できた、興味深い事実を以下に記す<sup>(2)</sup>。

(問)

教科書の文章表現の主眼は？

写真や図説を載せるため、それらを、いかにわかりやすい表現で説明するか。5, 6年の地理・歴史(特に後者)に関しては、学習指導要領に触れる部分も多く、表現に腐心している。(例・東郷平八郎の扱い)

(問)

「子供にわかりやすくする」ための表現にする工夫はなされているか？

文章作成に当たっては、大体、中の中～中の中の下の子の成績の児童が読んで理解できるように心がけている。明確な基準（用いる語、解説を要する語等）はなく、文章執筆者の主観によるところが大きい（曰く「長年のカン」）。しかし、読んでもわからない児童は確実におり、高学年になるほど、その傾向は強まる。また、これに比して、授業中に、教科書中の用語解説に時間をかける割合も増えていく。もっとも、このような指導がどの程度なされるか（なされないか）は、あくまでも現場の教師自身の裁量である。

(問)

各教科間で、執筆内容や表現について、意見交換を行ったり一定の基準を設けたりしているか？

全科目を網羅して出版している関係上、各教科間で、内容に関しては意見交換を行い、テーマ別教科関連表を作成している。この表に含まれる項目（自然教育、情操、人権、平和、消費者等）に関しては、各教科間で相互乗り入れして指導することが、意図されている。これは、独自の取り組みであり、他社ではなされていない。

基本的には、小・中・高並びに各教科の編集委員は分かれており、これ以上の接触はない。文章作成も、各教科で分かれて担当している。

以上の事実から、この項のはじめに述べた問題点は、教科書作成の段階で、半ば放置されている事態が浮かび上がって来た。次頁では、これに、より具体的な検証を加えてみよう。

## 注

- (1) 小学校の場合、社会科の教科書は、現行では東書・教出・大書・日書・学図・中教の6社のものが使用されている。このうち、国語科の指導書中に語彙表のあるものは、東書のみである。また、道内採用の教科書は、殆んどが東書・教出である。これらの状況を理由として、比較するものを、東京書籍の小学校社会科と国語科の教科書が適当であると判断した。なお、1年生に関しては教科書がなく、副読本が同社から出されているが、体裁も2年生以上の教科書と変わらず、使用状況も、ほぼ全校に渡っているところから、これを教科書と同様であると判断した。
- (2) 東京書籍 北海道支社（平成3（1991）年、6月13日）における取材による。

## 三 小学校社会科教科書の「語彙表」作成

### 1. 目的

教科書中において、難語句が放置されているという実態が、明らかになって来た。今回、社会科教科書に関しても、国語科のように語彙表を作成し、各語の難度や分布を測ることで、その実態をより明らかにし、教科書の語彙の、今後への指針としたい。

### 2. 方法

①各学年とも、本文、脚注、本文以外の説明、図説や年表等の語をすべて対象とする。（ただし、助詞、助動詞等の付属語や、固有名詞－国名・人名・官名等－は除く。例外として「大臣」「將軍」等、日常生活で応用範囲の広いと思われるものは掲出した。）

②掲出した単語を、次の項目に関して分類・記述する。

#### 単語

初出時の様子のままに掲出する。すなわち、ひらがなで初出したものはそのまま等。ただし、活

用形は終止形に統一（打ちくだかれた→打ちくだく等）。

**初出**

その単語が初出した時期，6年上に初出したものは「6. 1」とする。

**教材**

目次の大項目を記す。細分化された各項は略す。

**初出状況（社会）**

初出の単語を含む文の成分が明らかになる部分を，原文通りに抽出する。原則として「主語－補語」の関係を押さえる。

**備考**

類義の用例や難度の段階・解説の有無，略語の正式名称等を記す。

**品詞**

品詞名を記す。その他，接頭語，接尾語，造語成分等の別も記す。

**語彙**

小論では「新教育基本語彙（阪本一郎 昭和58（1983）年 学芸図書）」並びに，一部に関して「教育基本語彙（同 昭和48（1973）年 牧書店）」を分類の根拠とし，難度段階を記す。

以上は，社会科の教科書に関する分類である。次に，これらの単語を，国語科と比較するための，分類項目を記す。

**初出（国語）**

社会科で掲出した単語が，国語科教科書ではどこで初出するのかを記す。見方は下の通り。

（例） $\underbrace{5. 2.}_{5 \text{ 年下}}, \underbrace{131}_{131 \text{ ページ}}$ に初出。

**文種別**

次の3種に大別して分類する。

物語（詩も含む）

説明（伝記も含む）

言語（作文・漢字指導教材も含む）

**初出状況（国語）**

国語科の教科書中に初出した部分を抽出する。方法は社会科と同じ。

③分類結果に基づき，単語総数，分布状況，難度等について分析を加え，考察する。

以上の方法で語彙表を作成した。

**3. 分類結果・考察**

**①初出語数の比較**

両教科の初出語総数と各学年毎の分布は，表1のようになった。これをグラフに直すと，図1のようになる。

初出語数では大きな差がないものの，各学年の分布を比較すると，その対照的なことがよくわかる。特に，国語科が，1年生を頂点として，後は若干の増減はあるものの，ゆるやかに減少してい

（表1）初出語数の比較

学年 \ 教科	国語科	社会科
1年	935	174
2	592	383
3	723	631
4	806	774
5	768	760
6	673	1424
計	4497語	4146語

るのに対し<sup>(1)</sup>、社会科はそれとは正反対の軌跡を描く。特に、6年生のみで初出する語は、次位の4年生の2倍近く、爆発的な増加率である。このことだけを取ってみても、児童の負担が年を追って増し、しかも6年生に集中している事がわかる。

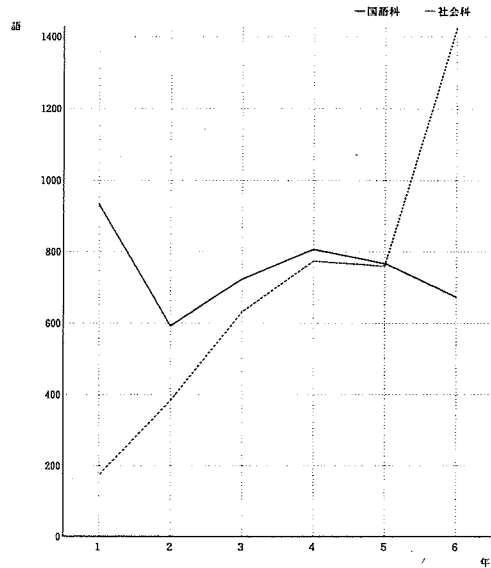
②難度段階による語の分布の比較

「新教育基本語彙・凡例(3)」によると、各単語の、それを学習させることが望ましい学年段階と、その重要度(難度)は、次の通りである。

(表2) 各単語の望ましい学習学年段階と重要度

小学校		中学校
1~3年	4~6年	1~3年
A 1 2570 語	B 1 2364 語	C 1 2444 語
A 2 1730 語	B 2 1979 語	C 2 2344 語
	B 3 1600 語	C 3 2139 語
		C 4 2101 語
小計 4300 語	5943 語	9028 語
総計		19271 語

(図1) 「初出語数の比較」



これをもとに、各段階での語が文章中に登場する割合の期待値を割り出してみると、次の計算法になる。

(各段階語数 ÷ 総計) % = 割合の期待値  
結果は、表3の通りである。

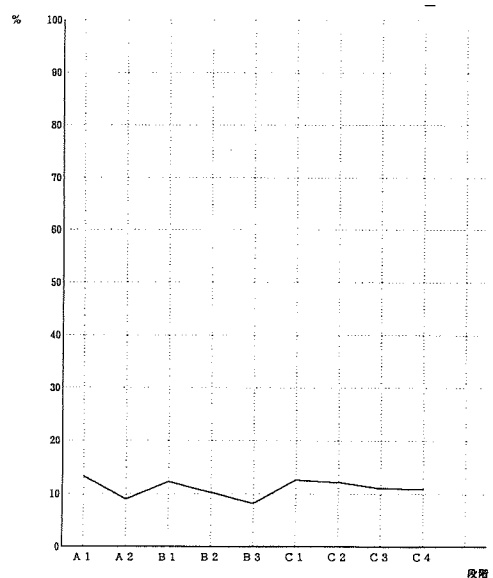
(表3) 各段階語彙の文章構成割合期待値

段階	割合 (%)	学 年
A 1	13.3	小学校 1~3年
A 2	9.0	
B 1	12.3	小学校 4~6年
B 2	10.3	
B 3	8.2	
C 1	12.7	中学校 1~3年
C 2	12.2	
C 3	11.1	
C 4	10.9	

これを見ると、期待値は、どの段階でもほぼ均等に分布している。また、小学校段階で習得すべきであると分類されている語の割合は、基本語彙総数の53.1%となっている。これらは、各段階に偏りがないようにとする配慮からであろうが、実際に文章作成するにあたっては、必ずしもこの割合には対応しない。

次に、この結果をもとに「新教育基本語彙」等の難度段階による、社会科と国語科の語彙の分布

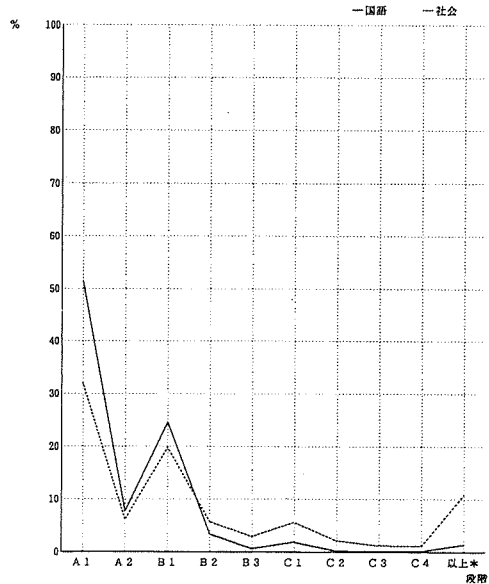
(図2) 「新教育基本語彙表3」



(表4) 難度段階による語の分布の比較

	国語	割合(%)	合計(%)	社会	割合(%)	合計(%)
A 1	2318	51.5	} 59.1	1326	32.0	} 38.1
A 2	343	7.6		252	6.1	
B 1	1112	24.7	} 28.8	825	19.9	} 28.6
B 2	155	3.4		235	5.7	
B 3	31	0.7		125	3.0	
C 1	85	1.9	} 2.6	234	5.6	} 14.8
C 2	14	0.3		90	2.2	
C 3	9	0.2		54	1.3	
C 4	11	0.2		48	1.2	
それ以外	A 1	96	2.1	75	1.8	} 4.6
	A 2	104	2.3	114	2.7	
	B 1	53	1.2	63	1.5	} 1.9
	B 2	26	0.6	81	2.0	
B 3	6	0.1	57	1.4	} 2.1	
C 1	2	0.04	23	0.6		
C 2	2	0.04	25	0.6		
C 3	0	0	23	0.6		
C 4	0	0	13	0.3		
以上	65	1.4	1.4	449	10.8	10.8
総計	4497語	100%	100%	4146語	100%	100%

(図3) 「難度段階による語の分布の比較」



※は新旧「教育基本語彙」による。  
2度にわたる分類を受けた数値。

を検証してみる。

この表をただけでも、その分布の異なりが確認できるが、これを表3の分布の割合と比較してみると、その差異の明確さが、一層認識できる。

「表現語彙の規範を目指す ((1)参照)」とした国語科の語彙表が、基礎となるA 1,そして、中程度の段階における基礎となるB 1に、語彙数を集中させているのは、その意図の端的な表われである。

ここで、A~Cどの段階にも該当しない「それ以外(表4)」の欄を御覧いただきたい。これらは「新教育基本語彙」による分類に当てはまらなかったものであるが、国語科では全体の9.3%,社会科では23.1%と、それぞれ全体の1割、或いは1/4近くという高い割合を占めている。これらの語彙は、通常ならば「A~C以上の難度の語彙」と解釈されるが、小論では、もう一度これらに改訂前の「教育基本語彙」を基準とした検証を加え、表4下部「それ以外」の結果を得た。

これらの結果のうちA~Cの段階に新たに振り分けられた語を、そのまま各段階に分散させて割合の数値とするのは無理があるが、この2回の検証を経て、A~C以外の段階になった語彙は、「(新)教育基本語彙」以上の難度であると理解できよう。

さて、新たに「それ以上」となった語彙は、表の通り国語科は1.4%と、ぐっと減少するが、社会科は10.8%と、半分弱の減少に留まった。しかし、かえって両者の差は広がっている。

これらの語彙を、社会科の語彙表から抽出してみると、新しい語や専門用語が多く、国語科教科書中に記載されているものは少ない<sup>(2)</sup>。

また、社会科教科書の場合、4年生と5年生の巻末に「むずかしい言葉」の欄を設け、それぞれに解説を付しているが、それに該当する語47語のうち、国語科教科書中に記載されているものは、

わずか4語にすぎず、うち、C4以上の難度と理解される語は、1語のみである<sup>(3)</sup>。

このように見てみると、社会科の言葉が、国語科において補強され、理解が増進されることは、殆んど期待できないことがわかる。ようやく語彙の基準づくりに着手した科目と、同時に、ほぼ執筆者の主観で文章が作成される科目と、言葉をめぐる双方の隔たりは、大きなものがある。

しかし、国語科の語彙表の作成に関しても、現時点では、まだ多くの問題を含んでいる。

小論で、基準として選定した「新教育基本語彙」は、改訂の際に22,500語から19,271語へと、その語彙数を減少した。国語科と社会科の語彙から、削除されたものを探ってみると、次のように大別される。

- a. 複合語
- b. 名詞化されたもの
- c. 他動詞・自動詞のどちらか
- d. 副詞
- e. その他

aは、「とりのぞく」「助け合う」「乗組員」「色鉛筆」「川底」のように、複数の語を組み合わせたもの。表4の「それ以外」の語のうち、これに該当するものは社会科188語(19.6%)、国語科100語(23.9%)と、削除された語の中では、もっとも高い割合を示す。

bは、～さ、～み等の接尾語をつけて、他の品詞から名詞化されたものである(ひろさ、楽しみ、広がり等)。これらは、元の接尾語には難度がついているが(～さはA2等)、それらが付いてできた品詞についての難度の説明はない。

cは、いわば<sup>ついで</sup>対になっている自動詞と他動詞のうちのどちらかを削除するものである(例「出る」「出す」のうち「出る」、「たかめる」「たかまる」のうち「たかめる」等)。しかし、自動詞と他動詞のどちらを削除するかは、各単語によって差があり一定していない。

d, eは「みるみるうちに」「ぴんと」「なお」「ひろびろと」「でも」「はじめて」「半分」「部分」「老人」等であるが、基礎的な語彙も多い。

表4によると、削除された語を難度別に見た場合、A段階が最も多く、B段階は、社会科では、A段階の80%、国語科では、42.5%まで減少し、C段階では両教科とも殆んどない。

以上の語彙が削除された経緯についての考察は、ここでは述べないが、その内容を分析してみると、単に「A～C以外」の語彙として、一括して位置づけてしまうのは、非常に危険であることがわかる。しかし、国語科の語彙表は、「新教育基本語彙」のA～C段階に該当しない語彙に関しては、空欄にしてあるのみで、前述のうち分けや、削除された経緯についての言及はない。この表を見ただけでは、難度段階の欄が空欄になっている語彙は、すべて「難度C4」以上である難語句である、という誤解を招くのは必至である。次回の国語科語彙表の作成に関して、以上の点が改善されることを、願ってやまない。

## 注

(1) 「新訂・新しい国語(全)教師要指導書・指導資料編(平成元(1989)年 東書)」の中の「学習基本語彙表・分類語彙表について、作成者側は次のように位置づけている。

この語彙表は「小学校段階で表現語彙として指導されるのが望ましい」語を、「学習基本語彙(昭和59(1984)年 中央教育研究所研究報告第25冊)」、「新教育基本語彙」に基づき、「新しい国語」編集委員会(東書の内部機関)が選定し、学習段階をA, B, Cで定めたものである。

語彙表中の語で、教科書中で指導されている語は、学年・巻・ページを明示した。

「分類語彙表」は、これらを意味ごとに分類した表であり、これによって、教科書を中心としての関連語の学習も同時に可能になる。(平成3(1991)年8月12日 東書・指導書編集部の電話取材に対する解答)。

このように、この語彙表中の語は、表現語彙の基準として選定されたもので、そのまま教科書中の語がすべて網羅されているのではないが、小論では「教科書中において基本的かつ適切な語彙」とし、比較対象とした。

(2) 市議会(4年)、ビデオ(3年)、古紙・使いすて(4年)、気象衛星・光化学スモッグ(5年)等、いずれも日常生活ではよく使われる言葉であるが、十分な解説も付されず文章中に登場する。

(3) 「むずかしい言葉」に該当する語について更に分析してみると、次のような内訳になる。

総数45語のうち、B1-9語、B2-6語、B3-1語、C1-2語、C2-3語、C3-1語、C4-2語、それ以外-21語。また、国語科の教科書にも登場するものは、資源、平均、加工(いずれもB1)公害(それ以外)の4語のみである。また、この「むずかしい言葉」の欄は、4~5年の教科書のみが付されており、特に語彙数が増加する6年の教科書には、付されていない。

#### 四 6年生社会科教科書の語彙分析

これまで、社会科教科書の語彙の傾向と問題点について、国語教科書や新教育基本語彙と比較し、述べて来たが、論旨を整理すると、次のようになる。

- a. 学年を重ねるごとに語彙数が増加し、特に6年生では、1424語彙と初出語数全体の34.3%に当たる語が1年間で登場する。
- b. 難度別に分けてみると、A~C以外の語の占める割合は23.1%である。このうち、6年生1年間で358語が登場する。これらの語彙に「教育基本語彙」による再検討を加えると、C4以上の「難語」と理解できる語は、全体で449語となり、初出語数全体の10.8%、6年生1年間ではうち129語が登場する。これは、C4以上の語彙数の28.7%と3割弱を占め、6年生の初出語数の9.1%にも達している。
- c. 様々な場で繰り返し接する事によって、語彙は充実して行くが、社会科の専門用語は、指導時に教科書中の語として登場する以外は、他の場面で登場し、より深く理解する機会には、殆んど恵まれない。この傾向は、学年が進み、語の難度が増すほど顕著になっている<sup>(1)</sup>。

以上の3点から、社会科教科書の語彙の問題点を、もっとも如実に物語る例として浮かんで来るのが、6年生の語彙である。今後は、6年生の語彙に範囲を絞り、より様々な検証を加えて行こうと思う。

#### 注

- (1) 各学年の初出語が国語科教科書にも登場する例数は次の通り。

1年	142語	(総語数の81.6%)
2年	239語	( // 62.4%)
3年	337語	( // 53.4%)
4年	304語	( // 39.3%)
5年	165語	( // 21.7%)
6年	388語	( // 27.2%)

#### 1. 文体の特徴

教科書を丹念に読み込んで行くと、東書・社会科の場合、1~5年生と6年生とでは、その文体や構成に大きな差異が見られる。

1~5年生の場合、次のような構成で、ほぼ同じ文体で内容が展開して行く。

- ①教師の動機づけ（先生が～を見せて下さいました。）
- ②児童の調査（みんなは～についてもっと知りたくなりました。又は、調べてみることにしました。）
- ③教室での発表・討論（～さんが発表しました。～という意見が出ました。～という質問がありました。）
- ④教師の修正（～と先生がお聞きになりました。～とおっしゃいました。）
- ⑤児童のまとめ（～ということがわかりました。調べたことを～にまとめてみました。）

これらの文体に沿って書き進められた結果、専門用語（主として名詞）以外は、大体決まった表現が用いられることになる。

ところが、6年生の場合、この構成は用いられておらず、歴史、世界情勢等の事項を、一方的に説明する形で書き進められている。また、「むずかしい言葉」の解説も、ここでは付されておらず、文体や語彙の規範性が乏しい。

このような「縛り」のない状況の中で、作成者の意図や特徴等が、より顕著な形で登場することが考えられる。つまり、専門用語を難しい形のままで教科書中に登場させ、説明なしで押しつけるようなことが行われていないか、ということが危惧されるのである。

(表5) 6年生の初出語彙、難度別分類

		語数	割合(%)	合計(%)
	A 1	290	20.4	} 24.1
	A 2	52	3.7	
	B 1	368	25.8	} 29.5
	B 2	104	7.3	
	B 3	51	3.6	
	C 1	145	10.2	} 17.1
	C 2	54	3.8	
	C 3	21	1.5	
	C 4	23	1.6	
それ	A 1	20	1.4	} 4.0
	A 2	37	2.6	
以外	B 1	24	1.7	} 6.6
	B 2	42	2.9	
	B 3	28	2.0	
	C 1	16	1.1	} 4.2
	C 2	18	1.3	
	C 3	17	1.2	
	C 4	8	0.6	
	以上	129	9.1	9.1
総計		1424	100	100

## 2. 全語彙の分類・考察

6年生の教科書に初出した語彙 1424 語彙を、難度別に分類すると、表5のようになる。

A 1, B 1, C 1といった各段階の基礎となる難度の段階に語彙が集中し、更にC 4以上の難語句が全体の9.1%を占める、といったように、平易な語彙と難語彙の両極端に分布が偏っている傾向が見られる。特に、C 4以上の難語句は、全体の3割弱が6年生1年間で登場しており、総語彙数の多さと合わせて考えると、習得にはかなりの負担を伴うであろうと推察される。<sup>(1)</sup>また、前述した語彙の傾向—平易な語句と難語句の混在—も、文体の統一を欠き、わかりにくさを助長する一因となり得ている。

以上、語彙の分布状況からの問題点を考察した。

## 注

- (1) 表5並びに図2中の「C 4以上」の数値に関しては、前章「三」中で述べた「教育基本語彙」を基準とした再検討に基づくものとする。

## 3. 国語科教科書との語彙の重複

この章の最初で、語彙は様々な場で繰り返し接することによって充実すると述べた。一つの語を様々な言いかえによって説明し、以前に得た語彙と結びつけることによって、一層の充実がはかれ

る、ということなのであるが、このためには、学校現場においては、様々な教科間での、言葉のやりとりを活発にする事が必要である。

しかし、現状では、そのような事はあまり期待できない。しかも、学年を追って、語彙数や専門用語が増加して行くに伴って、却って、重複する語は減少して行く。

次は、難語彙の割合が最も多い6年生の語彙について、その状況を更に分析してみる。

表5と表6を並べてみると、単語の難度と重複率が反比例することがよくわかる。また、前章(「三」注(2))でも述べたように、重複する内容も、社会科の専門用語に関しては殆んどない。

それでは、国語科教科書のどんな分野で、重複が起こっているのだろうか。数は少なくとも、効果的な場で語彙に接することができれば、その充実を助けるはずである。

ここでは、前章(「三」の2 ②)の語彙表作成の「方法」に沿って、重複している388語を分類してみる。

表7によると、内容の面で最も重複が期待できる「説明」教材が、意外なことに最も少ない。説明文教材には、地理的・歴史的な要素を盛り込むことも十分可能である。双方で、内容や言語表現に関する意見交換を活発に行い、各学期一つ位でも重複する教材を設定すれば、両教科の理解を相互に促進指導し合うこともできるのではないだろうか。

また、最も重複例が多いのが言語教材で、ほぼ半分を占めている。この教材の指導方法は「反復練習を皆とする」というのが、大部分であろう。この方法が、楽しく有意義に語彙を充実させ得るのかどうか、ここでは述べないが、教科を越えて言葉の情報交換を行い、共通の基準を作る必要が急務であるということは、重ねて述べたい。

#### 4. 資料中の語の分類・考察

次に、これらの語彙が、教科書中どのような状況で初出しているのかを見る。

度々述べるが、6年生では語彙が急増し、2位の4年生の2倍近くになっている。この原因の一つとして、6年生になって教科書中に資料文が急増したことが挙げられる。

「資料」を定義すると、「本文以外の文献・図・グラフ・聞き書き・写真説明文等の総称」となる。特に、6年生になって、歴史的な内容や国際的な内容の説明のため、多用されるようになった。単語数のうち分けは、全1424語中、本文初出は934語、資料初出は490語である。

このように、資料中の語が全語中の35%にもなっている。6年生1年間での語数の急増は、すな

(表6) 難度別・国語教科書中の語彙との重複

		語数	割合(%)※
A	A 1	184	64.8
	A 2	7	13.5
B	B 1	141	38.3
	B 2	17	16.3
	B 3	8	15.7
C	C 1	10	6.9
	C 2	2	3.7
	C 3	0	0
	C 4	1	4.3
それ以外	A 1	5	25.0
	A 2	5	13.5
以外	B 1	5	20.8
	B 2	0	0
	B 3	0	0
以上	C 1	0	0
	C 2	1	5.6
	C 3	0	0
	C 4	0	0
総計		388	

※は各難度ごとの総語数(表5参照)中の、重複例の割合

(表7) 教材種別・重複例分類

	重複例数	割合(%)※
物 語	110	28.4
説 明	88	22.6
言 語	190	49.0
計	388	100

※は重複例全体に対する割合

わちこの資料中の語彙が原因であることが、これによってわかる。

(1)資料中の語の分布状況

では、資料はどのような語によって成り立っているのだろうか。

表5（前出）と表8を並べてごらん頂きたい。6年生1年間で初出する語の、資料中に占める割合がわかる。

資料の本来の目的は、本文を補助し、指導内容をわかりやすく児童に伝えることである。事実、これらのスポット的な読み物を通じて、教材への興味をかき立てられ、新たな知識や語彙を獲得する児童もいることであろう。しかし、これらの資料は難語句の出所となっている。また、本文と同じスペースに、小さな字で大量の情報が満載されている。ちなみに、1ページ当たりの字数は、本文で最大403字、資料では、その2.9倍に当たる最大1188字である。このスペースに、どのような

言葉を用いて資料を作成するのか、明確な基準もないままになされている現状では、かえって、児童の理解と教師の指導の両面で負担を増大させ、資料本来の目的を果たせない結果となっていることは、十分に考えられるのである<sup>(1)</sup>。

(表8) 資料中の語・難度別分布

	語 数	割合(%)※	
A 1	132	45.2	
A 2	24	46.1	
B 1	99	26.9	
B 2	35	33.7	
B 3	18	35.3	
C 1	44	30.3	
C 2	15	27.8	
C 3	5	23.8	
C 4	12	47.8	
そ れ 以 外	A 1	8	40.0
	A 2	11	29.7
	B 1	7	29.2
	B 2	8	19.1
	B 3	12	42.9
	C 1	4	25.0
	C 2	4	22.2
	C 3	4	23.5
	C 4	2	25.0
	以上	46	35.7
総計	490		

※は6年生各難度語彙中の割合

注

(1) 教科書中のスポット的な読み物は次の通り。古代・江戸時代に集中している。

- 金印と邪馬台国（1頁638字、初出語7以下同）
- ヤマトタケルの物語（210字、10）
- 17条の憲法（90字、9）
- 蘇我氏のめつ亡（165字、9）
- 新しい文化を求めて（遣唐使）（576字、13）
- 貧窮問答歌（口語訳）（272字、17）
- 農業についての研究（青木昆陽）（800字、10）
- 慶安の御触書（口語訳）（224字、11）
- 農民のたたかい（504字、4）
- 「学問のスゝメ」（500字、10）
- 農村の様子・紡績工場の仕事（750字、11）
- 東京大空しゅう（357字、25）

以上、単元名「日本の歴史1、2」より。

以下は単元名「わたしたちの生活と政治」「世界の中の日本」より

- K子のうったえ（210字、13）
- みんなで環境を守る（681字、13）
- 平和をいのる小学校（540字、11）
- 地球と地球儀（420字、5）

- サウジアラビア (900字, 15)
- 被爆者証言 (484字, 12)
- 農業技術を伝える仕事 (486字, 11)

## (2)国語教科書中の語との比較

それでは、これらの語彙が、同時期に、他教科においても学習され、より効果的に獲得される可能性はあるのだろうか。次に掲げるのは、資料中の語と、難度別・国語教科書中の語彙との重複の状況である。

この表は、表6と比較対照させることによって、考察をすすめることができる。

両者を比較すると、A1～C1間は重複率が低下していることがわかる。それ以上の難語句についても安心というわけではない。もともと重複する語そのものが殆んどないため、一語の増加でも、相当、割合が増加する結果になるのである。事実、表6(前出)と比較してみると、C2は減少し、C3、C4は増減なしであることがわかる。ここで、その各該当例について、もう少し詳しく見てみたい。

資料中のB2～C4以上の、国語科教科書と重複する語は、次の通り。

- B2：保健，首都，高校生，気(け)
  - B3：チーム，～省
  - C1：ぼうがい，比較，熱意
  - C2：関心
  - C4：憲法
- それ以上はなし<sup>(1)</sup>。

この中で「保健」「首都」「高校生」「チーム」「省」は、国語科教科書巻末の、言葉をジャンル別に分類して掲出した一覧表に登場するもので、文脈の中で促える形にはなっていない。「憲法」も、漢字・漢語の練習問題の一文として

「憲法は、国を治めるものになっている」(6年上)と、単独で掲出されている。いずれも、国語科の教材としては、等閑視されがちな位置にある。しかし、社会的な語彙が国語科と重複する例が、ここまで来て初めて確認されたのである。

## (3)問題点の整理

本章では、資料中の語について述べた。これまでに、以下の問題点が明らかになった。

- a. 6年生の語彙の急増は、資料中の初出語彙による。
- b. 本来、本文補助の目的を持つ資料文が、かえって負担となっている面も多い。
- c. 全語彙と同様に、或いはそれ以上に、他教科(国語)と語彙が重複することは少ない。特に、

(表9) 資料中の語・難度別・国語科教科書中の語彙との重複状況

	語数	割合(%)※	
A1	80	61.1	
A2	2	8.3	
B1	27	27.3	
B2	4	11.4	
B3	2	11.1	
C1	3	6.8	
C2	1	6.7	
C3	0	0	
C4	1	9.1	
それ以外	A1	1	20.0
	A2	2	40.0
	B1	2	40.0
	B3	0	0
	C1	0	0
	C2	0	0
	C3	0	0
	C4	0	0
	以上	0	0
総計	129		

※は資料中の各難度語彙中の割合

専門用語については、教科書で接する以外に改めて接する場合は殆んどなく、これらの語彙の理解や獲得は、量・質両面で困難と言える。

これらの問題の解決は、目下のところ現場の努力に頼るしかないという、甚だ心もとない状況である。しかし、これを機に、各教科間でより一層の情報交換や相互理解が進み、共通の語彙の基準を持つところまで成長して行くことを願う。

## 注

(1) 表6並びに7中の「C4以上」の数値に関しては、前章「三」中で述べた「教育基本語彙」を基準とした再検討に基づくものとする。

### 5. 難語彙の基準についての考察

6年生の語彙の中でもう一つ問題になるのは、難度C4以上の語句である<sup>(1)</sup>。

これらが初出語総数に占める割合は1割弱と高く、その指導は軽視されるべきではないが、教科書を見てみると、十分な指導がなされ得る範囲を超えた語彙が溢れているのが現状である。これらの語彙が、どのような規範によって選択され教科書に登場するのかわかり、見ていきたいと思う。

6年生の教材は次の三分野で成立する。

日本の歴史1・2（歴史的分野）

わたしたちの生活と政治（公民的分野）

世界の中の日本（政治・経済・世界地理的分野）

これらの分野の専門用語を所収したものとして、

①「学術用語集・地理学編（昭和56（1981）年 日本学術振興会）」

②「新版日本史用語集（昭和52（1977）年 山川出版社）」

以上2点を選び、この中の記載語と6年生教科書中のC4以上の語が、どの程度重複するのかを調べた。結果は次の通りである<sup>(1)</sup>。

①に登場する語彙

総数：6（すべて名詞）

単独：2（地理学、新田）

一部：2（水質、自然科学—記載語の一部として登場）

資料：1（水質—資料中の語）

②に登場する語彙（多数のため、数値のみ記載。）

総数：46（すべて名詞）

単独：33

一部：13

資料：8

②は高校の日本史教科書の用語を網羅したものであるが、その言葉が、そのままの形で小学校の教科書に登場し、難度C4以上の語彙の1割強を占める。それが本文や資料に散りばめられる。それらを短期間に指導し、覚えさせることが要求されるのが、現状である。すでに、相当数の語彙を獲得した高校生程度ならば、このような専門用語に接しても、参考書等に当たって理解を深めることも可能であろうが、小学生にそこまでは要求できないのではないだろうか。資料を含め、これだけの数量と難度の語を、的確に伝達し指導するのは、大人でも難しいことである。

伝達すべき歴史上の事実は確かに存在し、それに名づけられた語彙も確立してはいるが、それらを、児童にもわかりやすく理解できる言葉に言いかえるための基準の確立は、まだまだである。「わかりやすく」するために資料文等で補完を行っても、またその中に理解を起えた語彙が多く含まれ、かえって負担を増す結果となっている。執筆者個人の基準を越えた「誰にでもわかる」基準づくりが急がれる。

## 注

- (1) この場合の「C4以上」の数値に関しては、前章「三」中で述べた「教育基本語彙」を基準とした再検討に基づくものとする。

## 五 「教科書の言葉」への提言—おわりに

これまで、各章でも述べて来たが、最後に、小論中の調査結果と考察に基づき、今後の教科書の言葉にとって必要と思われることを述べようと思う。

### 1. 語彙に関する各教科間の意見交換を

東書の場合は、内容に限っては、各教科間で意見を交換している。しかし、その内容を表現する手段—言語—に関して、各教科が同じテーブルに就き、同一歩調をとるために話し合う予定は、今のところないと言う。おそらく今後共、実現の可能性は薄いだらう。教科間の専門（縄張り）意識や知識の隔たり等、阻むものは多い。しかし、小論冒頭でも述べたように、教科書の基本が「言葉」である以上、「いかにわかりやすく伝えるか」ということは、全教科の使命である。また、国語科の説明的文章の教材等に、1学期に1回位でも、同時期に他教科で学習している内容を盛り込み、語彙指導も併せて行うことができれば、教える側と学ぶ側双方にとって、多少なりとも負担が減少するのではないだろうか。

平成四年度からは、生活科が登場する。内容面での相互乗り入れのみならず、「どんな教材をどんな言葉で教えているか、教えるべきか」各教科間で関心を持ち、意見を交わし、自らの指導内容に取り入れ合っていく姿勢が望まれる。

### 2. 「教科書の言葉」のチェックの機会を

今回の調査や取材で明らかになったことは、教科書の言葉の難度は執筆者の主観次第である、ということである。これが、専門用語等をわかりやすくする工夫のないまま、教科書中に大量に提示するという実態を招いている。専門家以外の立場からこれらの語彙を見直せば、その難しさにすぐ気付くような語も放置され、「わからない子」を生じる原因となっている。

これらの事を防止するためにも、教科の専門外の者による「教科書のことば」のチェックの機会を整備されなければならない。構成要員は、言語の研究者、著述業、教師等、様々に考えられるが、その教科の専門外の者が携わるようにしなければならない。

なお、このような機会は、あくまでも適切な語彙の使用のためのものであり、内容の検閲のためではないことはいうまでもない。

### 3. 各教科共通の「語彙の基準」づくりを

今回の調査では、様々な語彙表や用語集、辞書等を用い、自らも小学校社会科の語彙表を作成した。

これらは、各々独立した専門分野に関しての語彙を網羅している。しかし、あくまで各々の専門分野に限ったことで、言語環境全体における位置づけまではわからない。各用語が、専門外の人々にとってはどの程度難しいのか、小学校の児童を対象とした場合、どんな言葉にすれば理解しやすくなるのか、等の点がきちんとした基準として確立していれば、今回の問題点として掲げた「多すぎ、難しすぎ」のような事態も、防げるはずである。今回は、社会科についての調査を行ったが、国語科以外は、教材文によって語彙の内容が著しく変化することはない。従って

- 教科書中の単語の抽出
- 分類による難語句の割り出し
- チェック機構による検討、言い換え語彙、適正語彙量等の決定

以上のことを教科書改訂の度に、繰り返し行うことで、やがては、全教科を網羅した「小学校に於て習得すべき語彙」が確立して行くと考えられる。文字通り遠大な計画ではあるが、国際化の時代と言われている現在、教科書の上からも日本語を見直し、基準づくりをすすめて行くことは、避けて通れない問題である。

教科書は、言語によって教科内容を伝達するものである。その言葉を、児童生徒によりわかりやすくすることが、教科書を作成し、使用する者のつとめではないだろうか。

以上

## 参考文献

- 「新教育基本語彙（阪本一郎 昭和58-1983 学芸図書）」
- 「教育基本語彙」（阪本一郎 昭和48-1973 牧書店）」
- 「新しい社会1～6（平成元-1989 東京書籍）」
- 「新訂新しい国語1～6（ ” ” ）」
- 「新訂新しい国語全 教師用指導書・指導資料編（平成元-1989 東京書籍）」
- 「言語要素とりたて指導入門（林進治 昭和45-1970 明治図書）」
- 「岩波小辞典 経済学（都留重人 昭和54-1979 岩波書店）」
- 「新版日本史用語集（昭和52-1977 山川出版社）」
- 「学術用語集 地理学編（昭和56-1981 日本学術振興会）」

なお、

東京書籍北海道支社 木曾稔氏

東京教育研究所北海道分室 主任研究員 岩井文男氏

安永武志氏

附属教育実践研究指導センター 瀬川先生 高橋先生 以上の方々の御協力に心より感謝申し上げます。

〔付記〕 小論は矢部が執筆し三上が指導助言を与えたものである。

以上